③生態系としてのまちづくり―寿町での取り組み―

執筆
岡部 友彦
コトラボ合同株式会社 代表
YOKOHAMA HOSTEL VILLAGE プロデューサー

1 日雇い労働者の街から福祉の街へ

寿町は、JR石川町駅から徒歩三分ほどの地域で、中華街や元町からも10分ほどのところに位置している。（写真1、2）広さは、約200×300mで、周囲を幹線道路と中村川に囲われ、戦後、米軍に接収され、資材置き場となっていた地域だ。接収が解除された後から、当時盛んであった港湾労働者を対象とした宿泊所がつくられ、その後、桜木町から職安が移転されるなどにより、現在の骨格が形作られた。これが、日雇い労働者の街として名をはせた、いわゆる「ドヤ街」であり、高度成長期においては、非常に活発で血の気の多い場所であった。その後、バブル崩壊後の雇用の減少、そして、住民の高齢化により、今では、人口約6300人のうち、58%が60歳以上の高齢者であり、80%が生活保護受給者という構成になっている。かつては、家族で生活していた人達もいたが、今では、ほとんどが単身者であり、子供も統計上では、14人となっている。（出典 横浜市健康福祉局生活福祉部保護課寿地区担当「平成20年度寿福祉プラザ相談室―業務の概要―」）今や、日雇い労働者の街から福祉の街へと変貌を遂げているにもかかわらず、未だにドヤ街としてのイメージが強く残っている。高齢化、不法投棄、少子化、空き部屋など、様々な社会問題を内包しているこの街は、いわば、日本の縮図ともいえる所かもしれない。

そのような街で、いくつもの活動が行われているが、その中で、我々が関わっているものをご紹介したい。

2 自立自援をめざす「さなぎ達」

NPO法人さなぎ達は、2001年に設立された団体で、衣食住に医療・職業を足した衣医食職住を五つの軸として、住民のケアを行っている団体だ。（写真3）

もちろん、医療などの専門的な業務を組織内で行うことはできないので、NPOを中心として、医療であれば、クリニックが参画したり、住環境であれば、福祉ヘルパーの会社が連携したり、といった具合に、それぞれの役割を専門職が担う形をとっている。

❶医

具体的には、医療は、医師である理事長のクリニックが参画し、結核の防止や孤独死の抑制を含め、単身者の多い住民への看取りの医療を行っている。また、最近では、クリニックの看護士とボランティアの学生とで、寝たきりの住民をケアする、みまもりプロジェクトも行われている。

❷衣

衣料は、中心であるさなぎ

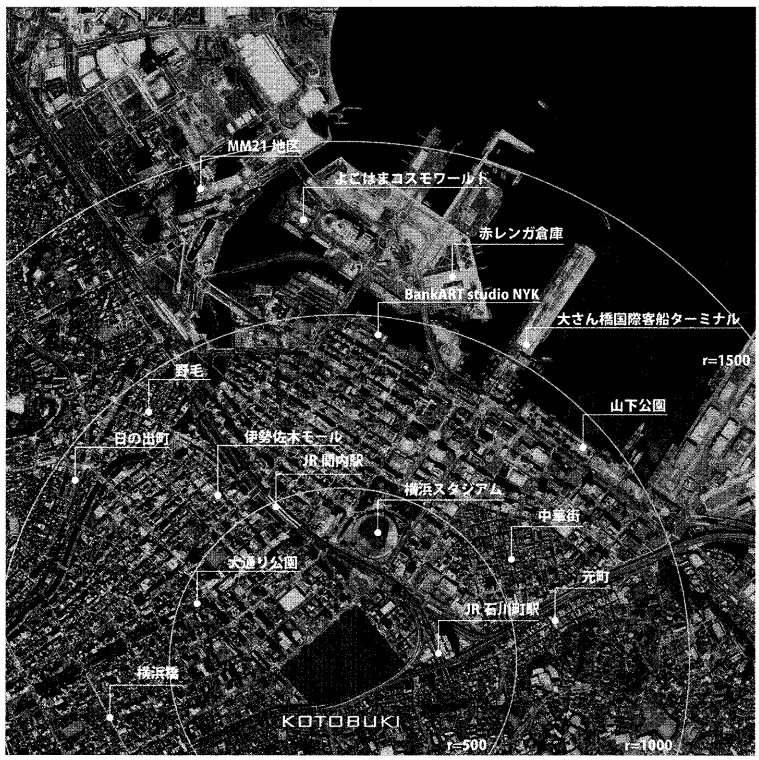

写真1 寿町（KOTOBUKI）の位置（DVD「寿」より）

写真2 寿町の風景

写真3 さなぎ達

達に日本中から届いた衣類の寄付をさなぎの家という、住民達のサロンスペースで無償提供している。そもそも、三畳という非常に小さな部屋で生活している住民にとって、簡易宿泊所の中にはコミュニティスペースもないこともあり、人と会話をする機会がなかなかうまれない。そのため、このさなぎの家では、住民同士が気軽に交流ができて、さらに、ボランティアに来る学生も含めて、一緒に話したり、緑化などのイベントを行ったりすることで、家族のような場づくりが行われている。寿町は、住民の約95％が単身の男性である。もちろん、昔は家族がいた人達だが、何かのきっかけで、家族を失わなければならなくなり、自分の居場所も失ってしまった人達ばかりなのだ。精神的に疲れ果ててしまった人達にとっても、そうでない人にとっても、家族のような関係の中に自分の身を置くことが、気持ちにゆとりを与えてくれる。そして、また新たなやる気を生み出すきっかけとなる。このように、ファミリー（家庭）を創り、ホープ（希望）を創ることで、もう一度社会に羽ばたくきっかけを創っていく。ホープをレスし、ファミリーをレスすることで、ホームレスになるという。この流れを逆さにした構図でさなぎ達は活動を行っている。

❸職

職は、「職業」であり、後述する食堂や、介護ヘルパーなどで、ジョブトレーニングという形で住民が働ける環境を作っている。住民の中には、もう一度、社会復帰したいという思いの人もいるのだが、いきなり通常の就職活動を行うのは難しいものがある。そこで、街の中で仕事に慣れるための環境を創ることにより、社会復帰への第一歩としての役割をになっている。

❹食

食は、さなぎ達が運営する、さなぎの食堂である。（写真4、5、6）ここは、2002年から始まっている食堂で、当時は、行政が発行しているパン券を持ってくると3枚のチケットに交換してくれて、三食温かい食事が食べられることを目的として創られた。パン券は、一枚で750円分買い物ができる券であるが、一度に使い切る必要があり、朝食をとりたければ、朝の時点で、朝、昼、夕の分を買わなければならなく、食事が冷めてしまうことになる。そこで、さなぎの食堂では、パン券をチケットに交換することで、三食温かい食事を提供している。最近では、パン券のシステム変更や、住民の高齢化により、住民の食環境を改善しながら、健康を考えていく方向にシフトしている。また、一昨年から始まったコンビニエンスストアのローソンとの提携では、弁当工場で、出荷されない余剰食材を無償提供してもらい、定食の食材として活用する仕組みが創られている。

❺住

最後の「住」は、寿町の住環境である。高齢化の進んだこの街では、杖をついて歩いている人、車いすに乗っている人など介護を必要としている人が多い。しかし、ニーズはあるものの、かつての街のイメージが尾を引いて、この街に福祉介護のヘルパーが入ることはなかった。そこで、住民が福祉介護ヘルパーの資格をとり、住民で住民のサポートをするための仕組みがとられるようになった。街にとって、介護のサービスが生まれるとともに、住民の働く場も生まれることとなった。

3 モノづくりからではなく、コトづくりを

さなぎ達の活動は、高齢化する住民に対して、いかに生活環境を改善していくか、いかに自立自援のサポートをしていくかに重心を置いて活動している。我々は、それとリンクする形で、街自体に焦点を当て、諸問題の改善と、今後の寿町を見据えた活動を行っている。

❶「どや」から「やど」へ

ヨコハマホステルヴィレッジ（以下、YHV http://yokohama.hostelvillage.com）は、その代表的な取り組みで、人口構成の偏ってしまったこの街に、新たな人の流れと新たな産業、そして新たなイメージを構築するプロジェクトである。寿町の人口は約6300人であるが、簡易宿泊所の部屋の数は、約8500室と、現時点でも2000室以上も空室状態にある。今後、時が経つにつれ、ますます空き室の増加が見込まれる中で、如何にそれらを活用しながら街の環境を変えていけるかという方法の一つとして、空き部屋を改装し、もう一度「ドヤ」を「やど」へと転換させて、国内外の旅

写真4　さなぎの食堂　外観

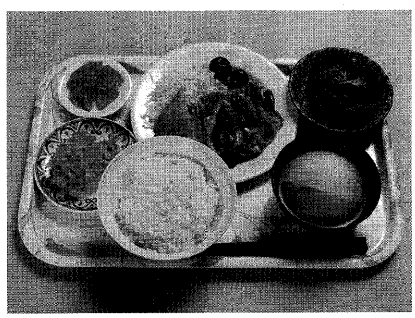

写真5　さなぎの食堂　300円定食

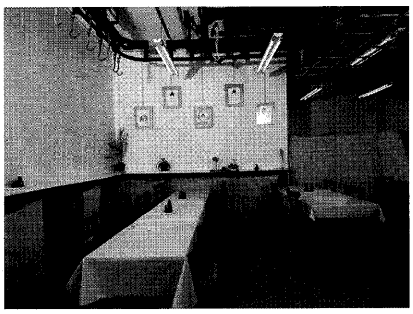

写真6　絵もかかっているさなぎの食堂

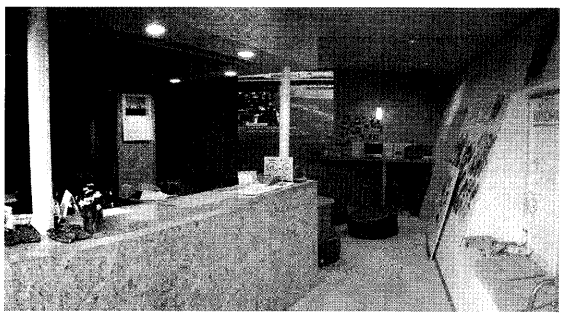

写真９　YHV　フロント

写真８　YHV　サロンスペース

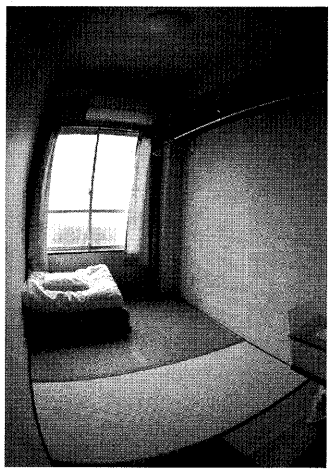

写真７　YHV　３畳の部屋

行者、学生、ビジネスマンなど街の外の人達を街へと呼び込む安宿事業を行っている。

この街にとって、空き部屋は、重要な資源であるのだが、今まで日雇い労働者や生活保護者しか対象としていなかったため、彼らが入居しなくなると、そのまま放置される状況が多く見られた。そこで使われなくなった資源を、街の外の人に対して安宿として提供することで、今まで入ってこなかった外国人や若い人達を呼び込み、新しい人の流れを作り始めている。

空き部屋といっても、一つの建物に集中している訳ではないので、我々のミッションに賛同してもらえるオーナーと提携することにより、建物単体でなく、街全体を一つのホステルと見立てて、ホステルとしての機能を創り上げていく形をとっている。簡易宿泊所は、日雇い労働者向けに作られたために、建物内にほとんど共有スペースがない。そのため、建物内で完結できない機能を建物の外に委ねる必要があり、地域を単位として形作る必要が出てくるため、YHVではフロントやサロンスペースは宿泊所と離れた形で作られている。（**写真7、8、9**）

現在は、4棟の簡易宿泊所と提携しており、約70室がホステルとして運用されている。あくまでも空き部屋の有効活用であり、住民の住環境を壊すようなことはしない。最近では、迷子になっている旅行者を街のおじさんが、フロントまで道案内してくれていたり、英語のできる人などは、道ばたで旅行者と話をしている人も出てきている。

また、YHVでは、ホステル事業に付随して、リネン交換や客室の掃除などの雇用機会も創り出している。さらに、現在夜間スタッフを各宿に置いているのだが、彼らは上京してきた若手のアーティストで、財政難である彼らに部屋を提供する代わりに、ホステルのサポートをしてもらう体制を作っている。このような形で、若い作家が寿町を拠点にして活動できる環境も整えられればと考えている。

横浜は、様々な政策でクリエイターが住みやすい環境になっているかもしれないが、結果的に作家の集積は施設内及び周辺にとどまり、街に展開しているとは言い難い気もする。単に集積するだけでなく、もっと地域を繋げていく仕組みを創る必要があるのではないだろうか。

❷海外では

London の Eastend に位置する Bromley by bow という地域は、内戦などで避難してきた難民が多く住んでおり、かつて非常に治安の悪かった地域である。そこに Bromley by bow centre という教会に付随した地域センターを、社会起業家として有名な Andrew Mawson が１９８４年に設立した。（**http://www.bbbc.org.uk**）（**写真10、11**）施設は、複数のビジネスサイクルをもつ形で形成されており、詳細は、有名であるため省略するが、この施設のモデルの中に、アーティストに安い賃料でアトリエを提供する代わりに、センターでの工芸教室の講師をしてもらい、テーブルやいすなど、質の良いものを制作、そして販売し、施設の運営資金として循環させる流れがとられている。単に安い賃料で提供するだけでなく、このようなスキームで、アーティストと地域との新しい関係を築いていくことも必要なのかもしれない。

写真 11　Bromley by bow centre 内部

写真 10　Bromley by bow centre 外観

❸イメージの改善へ
地域プロモーションムービー

YHVもそうだが、我々が行っているどのプロジェクトにおいても、街の問題解決とイメージの改善が表裏一体となっている。20年前のイメージが今なお多くの人々の中に色濃く残っていることは事実。しかし、街が変わろうとしているのも事実。このことをどのように示していくのか、企業が商品のブランド戦略を立てるように、地域のステレオタイプを取り除くための戦略もまた必要となる。その一つの取り組みとして、街の状況とプロジェクトを幅広い人々に認知してもらうために、プロモーションビデオの作成を行った。この手法は、ヨーロッパの地域再生でよく用いられる手法であり、一般市民へ向けて、プロジェクトの理解と認知を深めるために作られている。

ここでは、地域のプロモーション映像となると、おきまりの観光的なシーンや、ショッピングなど、魅力的にみせるシーン展開がつくられるが、寿ムービーでは、マイナスとなる部分も、地域の問題として露呈しながら、しかし、重くならないように、ポップ映像作品として創り上げた。それにより、展覧会や、イベントなどでも上映され、そしてDVDとして制作することで、人から人へと伝えていく媒体にもなり、多くの人々に発信することができている。

4 村を作るような人の流れづくり

僕らが、この街でやろうとしていることは、「村」づくりなのかもしれない。ホステルを基軸として、人の流れが構築されつつある。この流れは、人が行き来する街道のようなものだ。その街道沿いにたとえば、魚の捕れる漁港があって、水揚げした魚を街道沿いで売る人が集まり、仮設の市を形作る。その市が継続して行われることにより、ハードとしての建物が整備され、常設の市場が作られる。さらに、その市場で働く人達が周辺に住み始めることで、住んでいる人達を対象とした、別のサービスが生まれてくる。このプロセスが「村」の発生過程であり、それぞれの要素が相互依存する「生態系」を構築している。そこには、毒をもった生き物もいるかもしれないし、大群で動くものもいるかもしれない。その生態系の中で、どのような食物連鎖が形作られているかを認識することは、地域を眺める上で必要なことなのだろう。

5 いろんなところにいろんな人が集まっている

石川町駅の近くに、小さな古着屋がある。(写真12) 店舗は普通の古着を扱っている古着屋なのだが、お客さんとの関係、アーティストとの関係がとても豊かで、そこで創られた繋がりを活発化させ、ライブハウスや劇場で、ライブや演劇などを年数回行う仕掛け役にもなっている。とても面白いし、活気がある。街や地域を盛り上げていくメディアとしての可能性がここにみえる。(写真13)

アーティストがクリエイトする場を創出するだけでなく、いろんな人が、クリエイトしたくなるような雰囲気を創っていくことが必要なのではないだろうか。そこには、アーティストとコラボすることがあるかもしれないし、食堂とローソンのように、企業とのコラボもあるかもしれない。それぞれの地域や店舗に根ざしたコミュニティやアイデアをその人達が活発化させていける雰囲気が、街全体に広がっていけるととても良いのかもしれない。

横浜は、元町、中華街、伊勢佐木、野毛、関内、横浜橋など、横浜港を中心として昔から商店が栄えている地域のはずである。色々な人が色々な「コト」をつくり、色々な人達が集まってくる。単に商品を売ったり、サービスを提供したりするだけでない、人と人との関係性が街を元気にしていたのではないだろうか。

色々な人が、それぞれの場所に培ったコミュニティをさらに活発化させられるような街ができれば、多様な文化をもつ横浜が、さらに多様になるのではないだろうか。

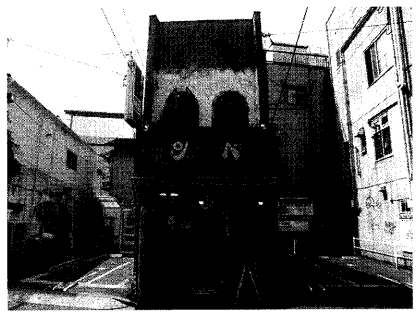

写真12　石川町駅近くの古着屋

写真13　古着屋で創られた繋がりが演劇へ